

# 高齢者調査について

堀 家 由妃代

## 【抄録】

本レポートは、共同研究「大学と地域の協働による共生（ともいき）のまちづくり～大学をコアとしたソーシャル・キャピタルの構築～」の調査の一環として行われた高齢者ニーズ調査の結果をまとめたものである。本学に隣接する楽只地区の住民4名より聞き取りおよびグループインタビューを実施した結果、地元高齢者が抱える厳しい経済事情、乏しい文化資源が浮かび上がった。他方、社会関係という点においては高齢者たちは住民同士の強いきずなでつながっており、その機能を維持する浴場や診療所、喫茶店の様子なども明らかになった。大学が地域との連携を模索するとき、まずはそこに居合わせる当事者の声に耳を傾け、どのような隣人となりうるか（どのような資源の交換や共有ができるのか）について考える必要がある。

キーワード：高齢者、まちづくり、ソーシャルキャピタル

## 1. なぜ高齢者ヒアリング調査なのか

本研究班は「大学と地域の協働による共生（ともいき）のまちづくり～大学をコアとしたソーシャル・キャピタルの構築～」をテーマとして共同研究を開始した。近年の不況や人々の物理的流動に伴い、人々がより豊かな社会生活を送るうえでの経済資本や文化資本以外の資源として、ソーシャルキャピタルの重要性が叫ばれている。本学が隣接する楽只地区はいわゆる被差別部落を含み、古くからの居住者が地域のネットワーク上にあるという点において、一定のソーシャルキャピタルを有しているといえる。本学の学生をはじめ、この地域を一時的あるいは恒久的に利用する人々とここに住まう人々との関係が希薄である（ゆえの課題の潜在化および顕在化）という現状もあり、大学が教育・福祉・まちづくりなど様々な形で地域にコミットし連携する必要がある。

現在の楽只地区について一言でいうならば、ご多分に漏れず「高齢化」の一途をたどっているといえる。京都市によると「平成26年9月15日現在推計の京都市の65歳以上の高齢者人口は37万2380人で、総人口に占める割合（以下、高齢化率）は25.3%となり、市内の約4人に1人が65歳以上となっています」ということある。平成22年の国勢調査などを手掛かりに楽只地区に限定してみていくと、平成2年の調査で3482人だった人口は、20年後の平成22年で2484人とこの20年で1000人の減少である。そして、総人口の31.8%にあたる768名が

65歳以上と、京都市平均を上回っている。

また、楽只地区は大規模な公営住宅(楽只市営住宅)を含む。楽只地区の70歳以上の人口は587名(男性231名、女性356名)で独居は164名(27.9%)であるが、楽只市営住宅に限定すると70歳以上人口129名中、独居が62名と、ほぼ半数が独居となっている。朝日新聞が47都道府県と20政令指定市を対象に実施した調査によると、全国の公営住宅で、一人暮らしの高齢者が全世帯の4分の1を占めているということである。「著しい「単身高齢化」を背景に孤独死も多発しており、昨年度1年間では計1320人に上っていた」という記述もある。高齢者に関しては単身入居が認められていたり、高齢者入居枠が設けられるなど、入居のしやすさはあるものの、入居後の「居住に関わる問題」まで行政のサポートがどの程度いきたっているかについてはよくわからない。

高齢化の問題は日本がトップを走っているものの、先進国と呼ばれる国々ではどこも同じような課題を抱えている。「大学と地域の連携」という文脈で高齢化問題を捉えたとき、アメリカをはじめとした「カレッジリンクコミュニティ」の取り組みがある。大学にシニアコミュニティを誘致し、大学とコミュニティが経済的、文化的資本の交換を行うのである。この取り組みは、徐々にではあるが日本の中にも広まりつつある。例えば関西大学は日本初のカレッジリンク型コミュニティを作り出した。具体的に、関西大学が連携しているシニア住宅に住む高齢者は、キャンパス内や住宅内で大学生たちと講義やゼミをうけることができる。他方、学生たちはシニア住宅のなかでアルバイトをしたり入居者からの奨学金に支えられて学生活動をすすめることができたりもする。また、高齢者の認知課題に特化したプログラムの提供を実施している東北大学の取り組みなどもおもしろい。関西大学の場合は、大学が有する資源に高齢者がアクセスする形になるが、こちらの場合はそこに集う高齢者の実態に即しつつ、研究機関としての大学のニーズも満たすというより相補的な関係になっている点において非常にユニークである。

しかし、本研究におけるフィールドは、わざわざ誘致するようなコミュニティづくりではなく、「たまたま居合わせた」もの同士がお互いの資源をどのように活用できるのか、その可能性についてさぐるものである。そのような性質を前提として、まずはこの地域に暮らす高齢者のニーズ調査を実施した。

## 2. 調査の対象と方法

今回は楽只浴場に従事する高齢者4名より、個別の生活史についての簡単な聞き取りを行った後、グループインタビューを実施した。

調査を実施するにあたり、研究班にて質問紙作成に関するミーティングを数回持ち、その後2名の地元住民にプレ調査を実施、その後、本調査の質問項目を確定した。本調査は平成24

年2月29日13時より1時間程度の個別インタビュー、その後、1時間半ほどのグループインタビューとなった。個別インタビューでは簡単なプロフィールと現在の生活状況が把握できるように具体的な項目を設定したが、グループインタビューについてはまずは「当事者のニーズ」に肉迫したいと考え、質問者は最低限の話題提供に留め、自由に話してもらうような形式を重視した。

ここで、4名のプロフィールを紹介する。匿名性の保持のため、氏名は仮名とする。

〈オザキさん〉

67歳女性。楽只市営住宅で独り暮らし。近所に3人の子どもたちがそれぞれ所帯をもって住んでいる。生まれたときからこの地域に住んでいる。最終学歴は中学校。以前は飲食店を営んでいたが、夫が亡くなり現在楽只浴場の嘱託職員となって7年目になる。浴場のアルバイト代と厚生年金が収入源。医療保険は浴場財団の保険加入で、社会サービスは特には受けていない。

一日のサイクルとしては、午前8時に起床し、9時からコーヒーを飲みに出かける。その後、10時から14時までに家の片づけ等をすませ、14時過ぎに浴場の勤務に入る。22時半に勤務を終え、帰宅後はテレビを見たりしながらゆっくりと過ごし、午前1時半ごろに就寝。週に1,2回内科に通院しており、仕事が休みの日にはパチンコに出掛けたりもしている。旅行は年に1回孫の海水浴に同行するが、あまり遠方までは行かない。そのほかにも年1回の慰安会や地区の忘年会などには参加している。

食生活については近くに住む家族と一緒に食べることが多い。近所に親戚が多く、相談などはしやすいが、浴場に勤務するようになってからは近所の人にあまり会わなくなったように感じる。

〈サイトウさん〉

79歳男性。もともとこの地域で生まれ育ったが現在は地区外に住居を構えて25年になる。息子家族（2組）が近くに住んでいる。最終学歴は小学校。小学校卒業後は農作物の運搬の手伝いや靴製造の見習い、織屋での丁稚奉公などを経験。部落解放運動に従事し、昭和32年からは学校管理用務員を務める（23歳から31歳まで）。定年まで用務員を続けることに不安を感じ、水道局に転職し、平成5年の定年を迎えるまで勤務。定年後も嘱託職員などで10年ほど勤務。現在は楽只学区の地域活動の3つの役職についている。生活は年金の受給によって成り立っており、国民健康保険に加入。社会サービスとしては年に4回、70歳以上の単身者を対象とする配色サービスを受けている。

7時に起床し1時間ほど近所の掃除を行い、その後は喫茶店で過ごす。午前中は所属する組織の会合などに参加し、昼食はその出先で食べることが多い。19時半から楽只浴場で入浴。

その後は浴場の休憩所で友人と交流しながら職員の仕事が終わるのを待つ。職員と合流して近所の食堂で夕食、3時に就寝。娯楽としては月に2、3回友人とカラオケやパチンコにでかける。近所のスーパーやコンビニの常連である。息子夫婦と姉が近くに住んでいるので何かと相談しやすい環境にあるが、できるだけ自力解決するように努めているという。

〈モリタさん〉

69歳女性。一人暮らし。24歳でこの地域に嫁ぎ、現在の居住地に住んで45年になる。子どもの家族など3組の近い親戚が近所にいる。最終学歴は小学校。中学校は形式的な手続きはしたが実質ほとんど行けず、卒業証書も受け取っていない。現在も漢字は苦手で読めない字もある。識字運動への参加によって、文中にわからない字があっても文脈で類推し読むことを知った。昭和53年～19年間給食調理員を務め、その後は土木に転職し、嘱託を経て楽只浴場でアルバイトとなる。学区の老人福祉員でもある。収入は、厚生年金と浴場でのアルバイト、国民健康保険に加入。社会サービス等は受けていない。

8時に起床し、9時ごろに朝食をとる。内科、整形外科などへの通院や買い物を済ませ、14時ごろ浴場に出勤。18時に職場で夕食を済ませ、22時に退勤。アルバイトがない日は一人で過ごすことが多い。毎日自炊をしており、外食はほとんどしない。旅行は年に1回、浴場の人たちの集まりで国内旅行に出かける。同じく浴場の人たちに声をかけられて忘年会には参加している。

相談事はまずは子どもに、必要があればきょうだいに。近所の人の温かさに支えられながら45年間を過ごしてきて、住みやすく本当の故郷のように感じている。浴場は職場であるだけでなく、人と交流できる場所だと考えている。地域の人だけでなく学生や他の地域からもたくさんの方の来訪があることを望んでいる。

〈セガワさん〉

74歳男性。妻と息子の3人で市営住宅に住んでいる。中学を卒業後、靴屋や日雇い、丁稚奉公など職を転々とする。その後、小学校と中学校の用務員となるがそこも10年で辞め、浴場の職員として28年間働いていた。3年前からはアルバイトとなった。収入は年金とアルバイト。社会サービスは受けていない。

7時に起床し、7時半から一人で喫茶店に行く。午前中浴場で働き、昼食を取りに自宅に戻る。夕方から再び浴場で勤務、22時に終わって夕食をとって帰宅、23時に就寝。体に異常はないが、週に2、3回診療所で血圧を測ったりする。月に数回、カラオケやパチンコにもいく。遠出の旅にはいかないが、よく妻と外食する。月に1回は息子の左側で3人で外食する。

近所にはいとこやきょうだいが住んでいる。最近の相談事はやはり経済的な困窮について。

### 3. 調査結果

上述した内容に加え、グループインタビューで得たデータをもとに、調査結果を簡単にまとめてみたい。ここでは、①経済的状況②文化的状況③社会関係に分けて検討する。

#### ①経済的状況

老後の経済事情は預貯金や年金に依存するが、この4名でも大きな差があるようだ。語りのなかでも公務員経験者とそうでない人（オザキさんのみ自営）とで、困窮度には違いがみられる。

Q：何かこの先お金がなくて不安やとかは

オザキ：うちやで。みんな年金が高い。うちはあらへん。働いたことがないからね。

Q：ほんまやね、お父さんいっぱい残してくれてない？

オザキ：残してない。土建屋やってたわりにはかけてあらへんねや。知らん。だから。そやし不安はうとところが一番多い。

Q：ほんなら言い方悪いけど今まで貯めてきた分を食いつぶして

オザキ：首つる寸前や

サイトウ：綱渡りや

Q：綱渡り

サイトウ：それほど年金があたりへんから、この人は特に

Q：そしたら今経済的には

オザキ：困ってます。

4名に投げかけた問いに対し、オザキさんがまず一番に声を上げた。主婦と自営業でやりくりしてきたオザキさんの語りからは、家計に関してはもっぱら夫に依存しており、老後の生活設計には自身は無頓着であったことがうかがえる。

また、同じ浴場関係者であってもサイトウさんは管理・運営側であり、あとの3名はアルバイトである。すなわち、この3名は高齢になってもアルバイトを必要とする経済事情にあるということがわかる。オザキさんは上述したように、夫の死後の実質の生活の支えとして必要であるし、公務員経験者のセガワさんも途中退職者のため望むほどの年金ではないこと、また、公務員として定年退職まで従事しても、「家庭の事情」によりさらなるアルバイト生活を余儀なくされるモリタさんなどその内実はさまざまである。なにより、オザキさん、モリタさんは高齢者といえどまだ60代半ばの「若い高齢者」であるため、将来への不安はひとしおである。

サイトウ：そう、我々も年いったらな

オザキ：あんたら70超えてるしええやん、いう感じやけど。うちらこれから言うても70なってへんかったら

Q: じゃあお風呂が一番

サイトウ: まあ住宅とお風呂やね

Q: 確かに同和地区の場合はお風呂無くなったら他の銭湯に行けるような

オザキ: そやけどこの付近にお風呂ないやん、絶対バス乗らなんやん。うちらまだバス券もでてないのに。

サイトウ: ちょうどお前中途半端やねん

オザキ: 中途半端か、歳がな

セガワ: 俺らもらえる

大阪市の2000年の実態調査によると、同和地区の高齢者世帯の年間収入は100万円未満が29.8%（全国12.9%）、100万～200万未満が42.3%（全国30.3%）、200万から300万未満が14.2%（全国18.9%）、300万以上が13.7%（全国37.9%）となっており、部落問題が経済事情にも大きく影響していることがわかる。安定した職に就くことができ、十分な年金の受給によって安心した老後を過ごすことができる人がある一方で、（部落解放運動等を経て）そうした流れに乗らなかった、あるいは乗れなかった人々は、生活困窮に陥るという構図が部落の中には顕著に残っているといえる。

## ②文化的状況

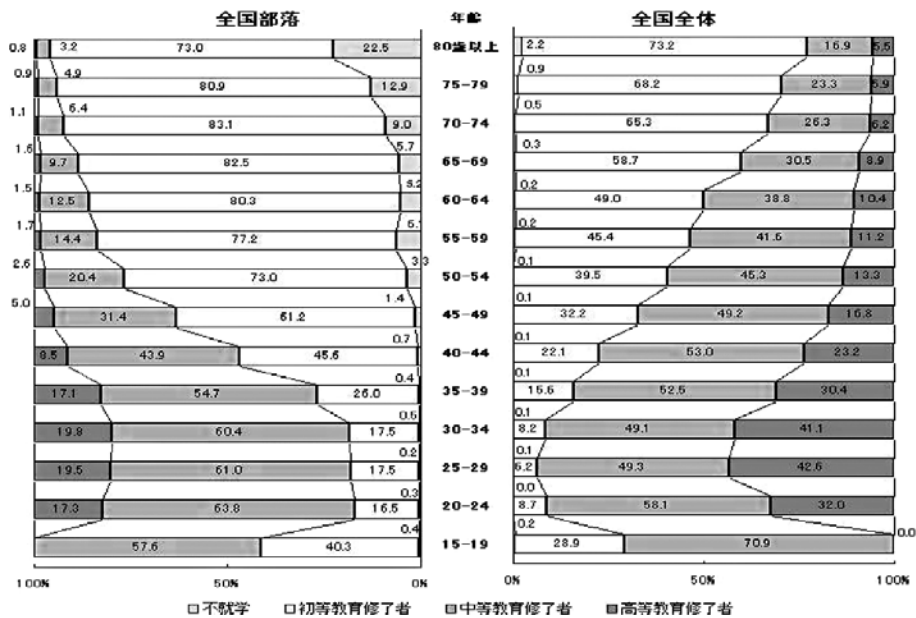
### 【学校教育との距離】

サイトウ: モリタさんは、小学校もまああんまり行ってはらへん。けども、給食調理員いうのがあって、識字に通って調理員の採用試験を。調理員しはってからもまあだいぶ苦労はしてはるけどね。

モリタ: 生まれたところは滋賀県の田舎なんですけどその家が貧しかったと思うんで、あちこちともう、転々と。家なんか何十軒て変わってきてます。

この4名に共通して言えることは、学校教育の恩恵を十分に受けることができていないということである。

下のグラフは、93年調査と90年国勢調査による年齢階層別の学歴構成であり、差別・貧困による不就学が根強く残っていた時代とその後々の影響について示したものである。今回のインフォーマントは現在67歳から79歳であるので、およそ下の調査時期にはグラフの45-49歳、50-54歳、55-59歳にあたる。例えば45-49歳のところをみると、全体では初等教育修了者が32.2%であるのに対し、部落では初等教育修了者が61.2%となっている。4名の聞き取りからも、職や住まいを転々としながら、学校教育から遠ざかって行った様子が明らかとなった。



（部落解放研究所編『図説・今日の部落差別（第3版）各地の実態調査結果より』）

### 【興味関心の狭さ】

オザキ：わたしらよそ出たことないし、もうここだけやさかい世間知らん。

Q：なんか住みやすさみたいな感じのものは

オザキ：そやなあ、わからへんな。

サイトウ：他の人に説明できへんことがいいことなんや

Q：そやね、結果的に出んでいいってことやし

サイトウ：悪かったら出てるやん。

モリタ：そうやね

サイトウ：うん、そういう解釈してくれたらいい

Q：ほんまやね、そういう解釈したらいい

オザキ：そういう度胸もないねやわ

サイトウ：出たことないちゅうのはここがええってことや

インタビューを通して出てきた文化的特徴の第2点目は、興味関心の狭さである。上のやりとりはもちろん、「この地域のすみやすさ」について尋ねた文脈で出てきたものであるので、このやりとりが直接的に興味関心の狭さを示していると断定することはできない。しかし、個人インタビューにおいて余暇の過ごし方等について尋ねても、カラオケ、パチンコ程度であり、生涯学習となるようなサークルや習い事などについては回答がなかった。また、会合についてもこのコミュニティ内での宴会に参加する程度であり、旅行については「興味がない」

「あまり遠くに行きたくない」という回答もあった。小学校、あるいは中学校卒業後、すぐに就労するといった経験を余儀なくされてきた人々にとっては、余暇の過ごし方についても制約が生じているのではないか。こうした興味関心の狭さは、結果的に物理的な行動範囲の狭さも引き起こす。4名に行きつけの場所（病院、商店、趣味の場所など）をたずねてマッピングしてみたが、その行動範囲は非常に狭いものであった。行動範囲の狭さはすなわち、そのテリトリー内の資源が無くなった場合に大きな危機に直面することを意味する。それが下の浴場をめぐるやり取りにも如実にあらわれている。

Q：ああ、浴場ね。

サイトウ：いまところ、今年入れて8年ぐらいは頑張ろうかな。

オザキ：とにかくお風呂無くなったらないもんね、うちらんとこ。アパートはな。だからよそ行かなあかん状態になったら絶対お風呂つけてほしい。(Q：お風呂つけてほしい?)だからつぶされんのはかなんわな。だからなくなっていたらどうしようというのはある。

サイトウ：だから8年の間に

オザキ：8年もちゃあいいで、もたへんかったらどうすんの！おっちゃんが生きてる限りならな、そらあれかしらんけどな。そやからもっと若いんやから不安なんや！なくなったらどうしよ。よそ行かんなん、お風呂だけはな。

実際に全国の同和対策の一つとしてできた浴場の多くは現在、廃止の一途をたどっており、楽只浴場についてもその存続についてはここ数年、常に議論の俎上にある。楽只住宅には風呂が設置されている棟とそうでない棟があり、いずれにしても楽只浴場は住民にとって生活上欠かせない場所となっている（浴場の機能についてはまた後述する）。重要な生活資源のひとつである浴場がなくなることは、かれらにとっては死活問題である。

### ③社会関係

【住民同士のつながりの強さ】

Q：ご家族、娘さんとか息子さんは

オザキ：息子2人と娘1人と3人

Q：子どもさんいはったらそれはそれで安心ですよ

オザキ：そう、やし、何とかな、今。

Q：はい。では健康面では

セガワ：私はどっことも、健康そのものです

Q：ご家族と住んでおられるから具合が悪くなくても

サイトウ：オザキさんは一人



Q：一人で住んではんの？でもあれか、すぐ近くに、連絡できるところに子どもさん

オザキ：ああ、そうやね。きょうだいも近くに

サイトウ：でも独居。3人独居

オザキ：そうそう

Q：という意味では心配なことありませんか何か

サイトウ：いや息子ら近所にいるから大丈夫。みなそうや。息子がいいへんかったら大変やで

上のやりとりにもみられるように、4名とも近隣にきょうだいや子どもが住んでおり、血縁関係にあるものが多く住むエリアに居住していることの安心感は持っているようである。しかし、そうした血縁関係と同じぐらい深いのが住民同士のきずなである。

モリタ：ここで初めて良さ、住んでうれしなっていう。みんなの温かみがわかりました。

Q：それはやっぱり人？

モリタ：そうです。みな親切やし、

オザキ：住みやすいねな

モリタ：そう、もうよそやらから変わってきていろんな人とあったけど、ここへ寄せてもうてほんまに45年、みんなにこうして支えられてやってこられたな言う気がします。ほんまに喜んです。

オザキ：まあええことばかりやで。みんなに塩梅してもうてきたさかい。支えられてきたさかい。

サイトウ：この人のダンナ、悪いけどお酒が好きでな、結構人に迷惑かけてきたんあるんや。その時にこの人をね、支えて。

オザキ：ささえられてきた

モリタ：ささえられて

サイトウ：できるだけケンカできんように塩梅してもうてるっちゅうのはある。

ここにでてくる「塩梅（あんばい）」とはおそらく、家族の中のトラブルを近隣住民も交えて調整してきたことを意味しているのであろう。夫の抱える問題を地域で共有してもらったことにより、モリタさんは「ささえられてきた」と感じている。個人史からわかるように、モリタさんはもともとこの住人ではなかった。貧困のために住居を転々とし、結婚によってここにたどり着いたわけであるが、この地で初めて人の温かみにふれることとなる。結婚した相手のために苦勞を強いられることもあったが、それも地域の支えにより「塩梅」してもらうことで、ここを自分の故郷のように愛することとなった。モリタさんのケースは、場所を共有する

人々とのつながりが、血縁関係と同じかそれ以上のものとなった事例であるといえる。他の3名についても、会合や旅行も「地域の集まりのものには参加」と回答しており、各々狭い興味関心の範囲のなかでも、地域に関しては積極的な姿勢をみせている。都市部でありながら頼母子講といった地域の金融システムが最近まで機能していたことも、人々の信頼関係の強さを示している例といえるかもしれない。

【運動の歴史を共有した者としての労働観】

Q：お金、やっぱりどうですかね、みなさんリタイアされてまあ年金とかで、まあそれは他のお年寄りとかも同じとは思いますが、さっきもお金困ってんねんとおっしゃってたんでサイトウ：うちの職員のなかでは生活保護でどうのこうのच्छゅうのはないですわ。なんとかまがりなりに。少ないけどね、何とかそれでしのいでる。

サイトウ：最低やっぱり生活ですね。生活。そろもうあかんかったら生活保護もらえるんやで。けどそれは僕は好きやないから。できるだけがんばってな、て。

オザキ：だから浴場やね。

サイトウ：ああ、浴場ね。

先述したように、サイトウさんは地元の部落解放運動の牽引車として尽力し、その影響力は今も大きい。住居、仕事、教育は部落解放運動の大きな成果である。労働も運動の成果として勝ち得たサイトウさんたちにとって、生活保護の受給はなかなか受け入れがたいものだろう。そうした生活保護受給に否定的であるサイトウさんの価値観は、他のメンバーによっても共有されている。しかし、ただ否定するだけでなくそれを補完するために、サイトウさんは地元の生活困窮者にさまざまな仕事をあっせんし続けてもいる。浴場もその一つなのである。また、運動という文脈で言えば、モリタさんは識字運動の恩恵を被った人でもある。運動は個人の制約を超えることができるものである。そうした活動に従事してきた人々であるからこそ、コミュニティへの思い入れは強いのであろう。

【人のつながりの維持装置としての浴場】

オザキ：だから第一にお風呂や思うわ。働かしてもらうのもお風呂やし。なくなったら家になんやから。

Q：お風呂行ったらお仲間にもたくさん会えますしね。

サイトウ：また会話もできるしね。

オザキ：そうやん

サイトウ：そろそやわ

(中略)

サイトウ：そやな，浴場やね

Q：やっぱお風呂ですかね，キーはね

オザキ：隣保館がないからそこしか言うところないやん。会話でな。ああでもないこうでもないって。

サイトウ：しゃべんのはお風呂やねん。

Q：じゃあそこで情報交換とかも

オザキ：いやいらんことも聞くしな

モリタ：つとめてるもんはな

Q：つとめてるひとは聞いてないふりするんですか

オザキ：ぐちばかり言われる。サイトウさんにいうて下さい，言う感じで

Q：でもあれがないとまた寂しいですよね，お金のことだけじゃなくてね

オザキ：なかったらな

モリタ：お風呂でもよそのお風呂いってもな，しゃべる人がおらへんかったら

このやりとりは，先述したような生活習慣，経済的よりどころとしての機能以上の役割を浴場が果たしていることを示している。モリタさんの最後の言葉にあるように，重要なのは風呂ではなく，「人」である。浴場は人々の情報交換の場であり，ストレス発散や悩み相談など，さまざまなコミュニケーションの場となっているのである。日常の他愛無いやりとりを通じて人々はお互いの心身の安否を確認している。事実，サイトウさんは地区外に一軒家を構え，そこには風呂がある。しかしサイトウさんは毎日楽只浴場に通う。そのことが，風呂に入ることの衛生管理以上の意味を示している。上にあるように，かつてはその機能は「隣保館」にあった。しかし同和对策事業が終了し，隣保館がその役割を閉じることで，住民は別の場所にその機能に移さざるを得なくなる。こうした情報交換の場としては，この浴場のほかに診療所や喫茶店などがある。行動範囲の狭い人々にとっては地域の中にあるこうした診療所や喫茶店も，浴場と同じようになくてはならない重要な資源なのである。

#### 4. まとめ

以上，地域の高齢者からの聞き取り内容について紹介し，簡単にではあるがグループインタビューの結果を①経済的状況②文化的状況③社会関係の3つに分類した。これらを「大学と地域の連携」を想起しながら，再度検討してみたい。4名からの聞き取りのみをもって研究テーマそのものに迫ることは困難であるが，今回のニーズ調査から考えられることについてできるだけ積極的に述べたいと思う。まず，4名の聞き取りからは，サイトウさんは社会的使命感から仕事を続けているものの他の3名は現在もアルバイトを続ける経済的事情を抱えていること

が明らかとなった。先にも述べたように高齢者の貧困の問題は全国平均に比して被差別部落において顕著である。インフォーマントが抱える経済問題は、「高齢者」の問題でもあるが部落問題でもある。法的根拠がなくなった今、このような状況にある高齢者をいかに経済的にサポートしうるのは大きな問題である。大学が高齢者の経済的事情に直接関与することはないとしても、そのような状況にある高齢者といかにつながることができるかを考えることは重要だろう。高齢者の経済事情を加味し、安価であるいは無償で提供できる資源が大学には豊富に備わっているはずであるし、この「社会問題」そのものをどう捉えるかについて、大学という研究機関として調査し、何らかのインプリケーションを出すことも重要な使命であると考えている。

次に、文化的状況について、具体的には学歴と活動範囲の問題について考えてみたい。現在、多くの自治体や大学で生涯教育の一環として「老人大学」のような講座を開設しているところがある。しかしそれは学校教育にアクセスすることのおもしろさを知っている人やそこに経済的投資をすることに積極的意味を見出している人に限られる。海外に見られるカレッジリンクコミュニティについてみても、ターゲットとなっているのは退職した大学教員など大学へのアクセス可能性が大いにある人々である。今回のインフォーマントたちは教育に否定的なのではない。それぞれ子育てを通して学校教育の重要性については経験済みであろう。4名に共通しているのは「学ぶ当事者としての経験が少なかった」ということである。しかし、識字運動などを経験してきた当事者でもあるからこそ、仕事や子育てが一定程度落ち着いた今、ふたたび学ぶ楽しさに接近してほしいと思う。そのような、参加者のニーズに即した生涯学習の在り方を模索することが重要であろう。また、今回のインフォーマントたちの物理的な活動範囲の狭さを鑑み、まさしく「おとなりさん」である本学ができることについては大いに検討の余地がある。バスをめぐるエピソードでもわかるように、今後、高齢者たちが自らの活動範囲を積極的に広げていくことは安易ではない。そこで、「おとなりさん」である本学の資源、それは学びの資源であってもよいし、喫茶店や食堂といった生活に直接関わるものであってもよい。要は、大学が有する諸資源を「おとなりさんに使ってもらう資源」としていかに想起できるかにかかっている。

最後に、社会関係についてみていく。こちらは、本学が地域側から学び取る必要があるものだろう。上に見てきたように、住民同士のつながりは非常に強い。それは運動をしてきた歴史、共有する文化の多さなどによるものである。ソーシャルキャピタルの観点から言うと、いわゆる Bonding capital は非常に豊かな地域であるといえる。しかしそれは非常に cognitive なものばかりであり、Bridging や Linking social capital 的なものはほとんどない。それがこの地域の少子高齢化や孤立化を進めているといっていよいだろう。本学は、その地域の動向を左右する資源そのものである。

佛大の人なあ、通りにな、ゴミほかしていかなんねん。弁当とか。あれな、一回佛大に言

ったことあんねん。ゴミ袋ぐらい持ってきて、て整理はこっちでするさかい。で、一回あったんよ。けどまたそのままや。（オガワさんの語りから）

上のエピソードが現在の本学と地域のつながりの状況を端的に表している。現在のところ、本学は地域にとって「時折問題を持ち込むもの」でしかなく、大学側の対応としても「クレーム処理」に留まっているのである。学生たちに「ゴミを捨てないようにしよう」とキャンペーンをはっても、それは根本的な物事の解決にはならない。この地域に愛着をもち、自分が捨てたごみを「誰が」片付けてくれているのか？を具体的に想起することができなければ、ポイ捨てなどはなくなる。我々教職員がまずこの地域にそうしたまなざしを向ける。そして組織として本当の意味で連携していくことが求められている。

#### 参考

芦田信之 2013 年「地域活性化をめざした高齢者 ICT 講習によるコミュニティづくり」成美大学紀要  
第 4 巻第 1 号

部落解放研究所編『図説・今日の部落差別（第 3 版）各地の実態調査結果より

蒲生 忍 2014 年「杏林大学地（知）の拠点整備事業で「杏林 CCRC」が目指すもの」杏林医会誌 45  
巻 3 号

京都市民長寿すこやかプラン推進協議会「第 5 期 京都市民長寿すこやかプラン（案）」京都市

内閣府政策統括官 2010 年「高齢者の現状及び今後の動向分析についての調査報告書」内閣府

野崎瑞樹 2014 年「地域住民にによる高齢者の見守りへの支援－都内 S 町事例からみた資源と課題」東  
洋大学福祉社会開発研究 6 号

大阪府市政「2000 年部落問題実態等調査」から見た同和地区の現状

(<http://www.city.osaka.lg.jp/fukushi/page/0000007067.html>)

ロバート・D. パットナム著 河田潤一訳 2001 年『哲学する民主主義』NTT 出版

（ほりけ ゆきよ 兼任研究員）